美空ひばりの普及と映画の関係（1955. 7 – 1958. 6）

――「東映優勢時代」――

斎　藤　　完

The Relation between Popularization of Hibari Misora and her Movies
(1955. 7 – 1958. 6)

SAITO Mitsuru

(Received September 28, 2012)

1．はじめに

本稿は「東映優勢時代」における美空ひばりの普及と映画の関係を明らかにするものである。「東映優勢時代」とはこれに先行する拙稿「美空ひばりの普及と映画の関係（1952. 7 – 1955. 6）――「松竹優勢時代後期」――」（斎藤　2011a）において示した時代区分であり、具体的には1955年７月封切りの『ふり袖侠艶録』から1958年６月封切りの『女ざむらい只今参上』までを対象にしている。出演した全37作品中、東映が20本、東宝が４本、宝塚映画が３本、新東宝が３本、新芸術プロが３本、大映が２本、松竹が１本、日活が１本となっており、まさに東映専属前夜、といった観のある時期である。

2．当該期間における美空ひばり――先行研究の概観の代わりに――

管見が及ぶ限り、当該期間における美空ひばりの普及と映画の関係を俯瞰するような研究はない。そこで、ここでは資料や先行研究などから当時の美空の状況を振り返りたい。

【表１】『平凡』誌における人気投票「花形歌手ベストテン選出人気投票」の結果（1955-58）

	1955	票数	1956	票数	1957	票数	1958	票数
1	美空ひばり	137450	美空ひばり	73512	三橋美智也	72443	美空ひばり	82175
2	春日　八郎	105947	春日　八郎	33016	美空ひばり	72365	三橋美智也	61903
3	江利チエミ	33414	三浦　洸一	24623	島倉千代子	34719	島倉千代子	36364
4	小畑　　実	33055	青木　光一	13243	春日　八郎	21911	春日　八郎	32712
5	田端　義男	24736	若原　一郎	13214	三浦　洸一	12334	三浦　洸一	17739
	総投票数	534439	総投票数	339154	総投票数	339154	総投票数	412552

表１は『平凡』誌上の人気投票「花形歌手ベストテン選出人気投票」[1]の結果（1955-58）であるが、一時的に三橋美智也に首位の座を僅差で奪われるものの、圧倒的な人気が継続してい

[1]『平凡』誌上の人気投票「花形歌手ベストテン選出人気投票」は1949年に開始された。同人気投票は「オール歌手人気投票ベスト・テン」「人気歌手ベストテン」などと表記されることもある。美空が初めてランクインしたのは1950年で第９位、その翌年に第３位。なお、ランキングは1952年から男女別となっている。

る状態には変わりはないことが窺える（なお、ランキングは男女別になっているが、表1はそれを男女混合にしたうえで上位5人を示したものである。女性に限定して見てみると、人気の独占状態がさらに明確に推し量られよう）。

こうした高い人気ぶりが映画と関連づけられて論じられている記事がある。

> 美空ひばりの人気はもう下火だなどと、いろいろ噂されているが、下火どころかますます盛ん……ということが、今年の春から来年にかけて、彼女が出演する映画、予定されている映画の数々からうかがうことができる。新東宝で作ったたけくらべ[2]に次いで、東宝のジャンケン娘に主演した彼女は目下東映京都撮影所で、東千代之介との共演作品「ふり袖小天狗」（監督・内出好吉）を撮っているが、これに続いて次の諸作品が各社で計画されており、まさに邦画界はひばりブームの観さえある（東タイ：1955.11.7）。

1956年の正月映画を見てみると、新芸術プロ『唄祭り　江戸っ子金さん捕物帖』、日活『力道山物語　怒濤の男』、東映『旗本退屈男　謎の決闘状』、東宝『歌え！　青春　はりきり娘』の4社の作品に出演しており、そのブームは明らかである。翌57年の正月映画でも新東宝『鬼姫競艶録』、大映『銭形平次捕物控　まだら蛇』、東映『大江戸喧嘩纏』『旗本退屈男　謎の紅蓮搭』と3社の4作品に出演している。

こうした状況を受けてか、1956年10月から『読売新聞』で自叙伝「虹の唄」が2か月以上にわたり連載され、『近代映画』誌では1957年12月号から「ひばりちゃん日記」の連載が始められた（1960年12月号まで続く）。また1958年4月下旬号の『キネマ旬報』では「美空ひばり・その魅力を分析する」と題した7ページにもわたる特集記事が組まれた。

長者番付で1位となったのもこの時期である。

> 三十二年度確定申告のうち芸能家、作家、プロスポーツ選手などいわゆる“人気もの”の所得金額と税額が二十六日国税庁でまとめられたが、それによると各界を通じてのナンバーワンは前年同様美空ひばりで、所得金額三千十八万一千円、税金一千六百四十五万円[3]（読売新聞朝刊：1958.3.27）。

まさに順風満帆なのだが、美空ひばりをめぐる状況に変化がなかったわけではない。1956年1月の大阪劇場正月公演では入場時の混乱でファンの少女が圧死し、同年にベーシストの小野満と婚約するも間もなく解消している。翌57年1月の浅草国際劇場での公演の際には「ファン」の少女に塩酸をかけられ全治三週間の傷を負った。

それぞれの出来事が彼女に何がしかの影響（心的外傷？）を残したことは想像に難くないが、これらにも増して注目されるのが、1957年6月の川田晴久の死である。川田は当時絶大な人気を誇っていた浪曲をギター伴奏で唸るというギター浪曲で名声を誇っていた。彼は美空ひばりの無名時代からその才能に注目し、芸能面・精神面で彼女をサポートし続けた。『ひばり自伝』には「川田さんと親しくしていただけたことは、つらい芸の世界に生きる上での一つのあたた

---

[2] 正しくは、新芸術プロが制作で、新東宝は配給のみ。

[3] これに「続いて作家の吉川英治二千五百二十二万九千円、同川口松太郎、同山手樹一郎、映画俳優長谷川一夫、作家井上靖、丹羽文雄、舟橋聖一が千六百万台、映画俳優片岡千恵蔵、作家富田常雄が千五百万台で以上がベストテン」となっている。

かい灯のようなものでした。わたしのたった一人の先生でした」とある[4]。

いわば精神的な支柱を失ったかたちなのだが、じつはそれ以上に、美空ひばりをいかに普及させるか、ひいてはどのようなイメージを一般に受容させるかという点において川田の死は大きかった。上前（1985）や大下（1992）の説によると、川田は美空が所属していた新芸プロのまとめ役として機能しており、それゆえに福島通人――デビュー前から一貫して美空をプロデュース[5]。新芸術プロの創始者であり社長――によるマネージメントが可能になっていた。「マネージャー家業（ママ）も長くなると気に入らない点が多くなりますね。とにかく私は契約書を見たことがない（週刊読売　1958：60)」という美空の母・加藤喜美枝は、福島に対する不快感ならびに不信感を抱きながらも川田ゆえにその方針に従っていたのである[6]。

川田の死は美空母娘と福島の分裂を促した。

1957年12月。川田の死から約半年後、福島は新芸術プロを退社し、福島通人プロを設立。

1958年８月。川田の死から約一年後、美空ひばりは「ひばりプロダクション」を起こし、映画に関しては東映と専属契約を結ぶ。

> 少女時代から何度もあった年齢の節目ごとに新しい企画を打ち出しては危機を乗り越えてきた通人だったら、この曲り角にどう対処しようとしただろう、というのは、非常に興味のあるifである（上前　1985：189)。

この一文が示唆するように、本稿が対象とする東映優勢時代までと、これに続く専属時代以降とで何かが大きく変わったとすれば、福島の存在の有無であろう。だが、上前が「if」としているとおり、その因果関係を勘案するのは憶測の域を出ない。したがって本稿ではあくまでもどのように美空ひばりが提示されたかに焦点をあて、論を進めていきたい。

３．映画の貢献度

美空ひばりの圧倒的な人気と映画はいかなる関係があったのだろうか。

表２Ⓐは『映画年鑑』（時事通信社　1957、58、59）に掲載されている「邦・洋画封切興信録」

---

[4]吉田司は昭和12年に大流行した三門博の≪唄入り観音経≫が「唸る浪曲から歌う浪曲への転換」と言われたことを受けて、「この＜歌う浪曲＞の世界を、ギターの音色にのせ＜ジャズ浪曲＞＜ギター浪曲＞として全面開花させていったのが、あの川田晴久だったのである。その＜川田節＞のエッセンスを受け継いで、美空ひばりの＜ひばり節＞が生まれた（95)」としている。上前は「川田ぶしを、いつも一緒に興行して歩くうちにひばりは覚えていった。彼女の小ぶしが、ときとして粘りつくように、またあるときは軽妙に揺れるところは、川田そっくりである（179)」とし、竹中も「歌手としての出発の時に、川田晴久という、不世出の大衆芸術家にめぐりあった。いわば歌のエンサイクロペディア（百科辞典）であった川田から、ひばりはありったけの知識と技術を吸収した。美空ひばりの『芸』は、そうして形成された（226)」としている。しかしながら、これらにおいてその影響関係は印象に依拠した後付けに過ぎず、管見では美空と「川田節」の具体的な関係は明らかではない。

[5]ひばりプロダクションの社長になった嘉山登一郎は「映画は福島がすべて取り仕切っていた」と回顧している（嘉山　1990)。

[6]福島も「仕事だと思って長い間がまんしていたが、その間何回やめようと思ったかわからない。とにかく彼女の映画八十本のうち、五十本以上をわたしがプロデュースしたが、これに関してひばりから直接礼をいわれたことはない」と不満を述べたうえで、「中村錦之助と大川橋蔵を探し出したのがこのとき。相手役とミックスして、人気の下り坂をみごとに脱出した。彼女たちは自分たちが錦之助と橋蔵を売り出してやったと思っている」と指摘してる（週刊読売　1958：59)。

をもとにして、観客動員数別の邦画作品数[7]と、それぞれが占める封切邦画全体に対する割合を表したものである。Ⓑは美空ひばり出演作品を同様に整理したものである[8]。Ⓑにおける丸数字は美空の出演作品名に該当する（具体的な作品名は表3を参照のこと）。

【表2】東映優勢時代における映画観客動員数別の作品数と割合

観客動員数（人）	全邦画Ⓐ		美空出演映画Ⓑ		
	作品数	割合	作品数	割合	作品名（表3を参照）
0～4,999	70	7.7%	0	0%	
5,000～9,999	239	26.5%	3	8.6%	⑥⑨⑬
10,000～14,999	244	27.0%	9	25.7%	①⑤⑪⑫⑯⑰㉓㉖㉜
15,000～19,999	170	18.8%	9	25.7%	②⑭⑲⑳㉑㉒㉗㉘㊱
20,000～24,999	97	10.7%	4	11.4%	④⑧㉙㉝
25,000～29,999	39	4.3%	3	8.6%	㉛㉞㉟
30,000～34,999	22	2.4%	2	5.7%	③⑩
35,000～39,999	8	0.8%	2	5.7%	⑱㉕
40,000～	14	1.6%	3	8.6%	⑦㉔㉚[9]
合計	903	100%	35	100%	

表をみると全体的な観客動員数の傾向に比べて、美空ひばりの作品のほうが多くの動員に成功していることが見てとれるだろう。とくに25,000人以上を動員する作品となると、全体では9.1%にしかならないのに対し、美空が出演する作品は28.6%と、彼女の人気の高さとともに普及媒体としての映画の影響力を示している[10]。

4．映画は美空ひばりの何を伝えたのか――歌か？　演技か？

「美空ひばりの普及と初期映画の関係」（斎藤　2010a）において、松竹優勢時代前期[11]に美

[7]「作品数」としたが、この時期では多くの場合が二本立て上映となっているため、作品数としては約2倍になる。

[8]『㊲ 女ざむらい只今参上』は『映画年鑑1960』に掲載されていたため、表には反映していない。なお、同作品の観客動員数は11,214人である。

[9]ただし『⑦力道山物語　怒濤の男』での出演は30秒に満たず、観客動員が美空ひばりによるものかは疑わしい。また『㉔怪談番町皿屋敷』と『㉚娘十八御意見無用』は併映作品（前者は片岡千恵蔵主演映画『大菩薩峠』、後者は新春オールスター映画『任侠東海道』）の集客力の結果だと考えられる。だが、これらを省いたとしても、25,000人以上を動員する作品は美空映画の20%を占める。

[10]年ごとの各社の「作品別配収ベスト5」によると、55年度の東宝作品第1位として『③ ジャンケン娘』、東映作品第3位として『⑧ 旗本退屈男　謎の決闘状』、新東宝作品第1位として『② たけくらべ』、日活作品第1位として『⑦ 力道山物語　怒濤の男』があがり、56年度の東宝作品第2位として『⑭ ロマンス娘』、大映作品第1位として『⑱ 銭形平次捕物控　まだら蛇』、新東宝作品第2位として『⑰ 鬼姫競艶録』があがり、57年度の東宝作品第1位として『㉕大当り三色娘』、新東宝作品第2位として『㉘ ひばりの三役　競艶雪之丞変化前篇』、同第3位として『㉙ ひばりの三役　競艶雪之丞変化後篇』、東映作

空が出演した映画は歌本位ではないことを明らかにし、さらに「美空ひばりの普及と映画の関係（1952. 7 – 1955. 6）――「松竹優勢時代後期」――」（斎藤　2011）では演技の比重が増していることを示唆した。

表３をみると、東映優勢時代における平均上映時間（㋐）は86分48秒、平均出演時間（㋑）は32分37秒、歌唱時間A（㋒）は５分09秒、歌唱時間B（㋓）は７分37秒であり、出演率は37.6％、歌唱率aは5.9％、歌唱率bは8.8％、歌唱率cは15.8％となっており、演技の比重がさらに高まっていることが読みとれる。この傾向は表３での「平均」の下に示した松竹優勢時代前期・後期の数字と比べても明らかであろう。

【表３】「東映優勢時代」における美空ひばりの出演時間／歌唱時間／出演率／歌唱率[12]

	上映時間 ㋐	出演時間 ㋑	歌唱時間 A ㋒	歌唱時間 B ㋓	出演率 ㋑÷㋐	歌唱率a ㋒÷㋐	歌唱率b ㋓÷㋐	歌唱率c ㋒÷㋑
① ふり袖侠艶録	91’15”	36’02”	5’20”	8’24”	39.5%	5.8%	9.2%	14.8%
② たけくらべ	94’26”	37’21”	0’04”	0’04”	39.6%	0.0%	0.0%	0.2%
③ ジャンケン娘	91’43”	38’08”	7’03”	9’25”	41.6%	7.7%	10.3%	18.5%
④ ふり袖小天狗	89’22”	46’12”	2’25”	3’36”	51.7%	2.7%	4.0%	5.2%
⑤ 笛吹若武者	89’14”	35’13”	4’19”	6’26”	39.5%	4.8%	7.2%	12.3%
⑥ 江戸っ子金さん捕物帖	91’00”	13’47”	4’57”	6’06”	15.1%	5.4%	6.7%	35.9%
⑦ 力道山物語　怒濤の男	83’59”	00’29”	0’00”	5’26”	0.6%	0.0%	6.5%	0.0%
⑧ 旗本退屈男　謎の決闘状	83’57”	12’52”	1’44”	2’29”	15.3%	2.1%	3.0%	13.5%
⑨ 歌え！青春　はりきり娘	83’59”	53’38”	12’25”	14’29”	63.9%	14.8%	17.2%	23.2%
⑩ 銭形平次捕物控　死美人風呂	90’13”	29’39”	2’14”	2’45”	32.9%	2.5%	3.0%	7.5%
⑪ おしどり囃子	79’15”	35’59”	2’42	4’59”	45.4%	3.4%	6.3%	7.5%
⑫ 恋すがた狐御殿	87’44”	41’59”	11’52”	16’34”	47.9%	13.5%	18.9%	28.3%
⑬ 宝島遠征	88’03”	29’22”	14’12”	18’39”	33.4%	16.1%	21.2%	48.4%
⑭ ロマンス娘	96’55”	41’02”	7’00”	9’21”	42.3%	7.2%	9.6%	17.1%
⑮ ふり袖太平記	86’34”	32’29”	3’22”	4’58”	37.5%	3.9%	5.7%	10.4%
⑯ ふり袖捕物帖　若衆変化	88’18”	48’06”	6’18”	9’13”	54.5%	7.1%	10.4%	13.1%
⑰ 鬼姫競艶録	84’29”	40’06”	6’03”	9’12”	47.5%	7.2%	10.9%	15.1%
⑱ 銭形平次捕物控　まだら蛇	88’11”	19’09”	3’22”	4’27”	21.7%	3.8%	5.0%	17.6%
⑲ 大江戸喧嘩纏	82’27”	21’50”	3’48”	4’46”	26.5%	4.6%	5.8%	17.4%
⑳ 旗本退屈男　謎の紅蓮搭	79’16”	9’26”	0’ 25”	0’ 56”	11.9%	0.5%	1.2%	4.4%
㉑ ふり袖捕物帖　ちりめん駕籠	86’10”	34’37”	5’03”	8’19”	40.2%	5.9%	9.7%	14.6%
㉒ ロマンス誕生	100’45	7’32”	2’36”	3’07”	7.5%	2.6%	3.1%	34.5%
㉓ おしどり喧嘩笠	94’11”	39’13”	3’30”	6’04”	41.6%	3.7%	6.4%	8.9%
㉔ 怪談番町皿屋敷	45’04”	23’00”	0’00”	1’47”	51.0%	0.0%	4.0%	0.0%

品第５位として『㉝ 丹下左膳』があがっている。なお、『⑮ふり袖太平記』と『㊲ 女ざむらい只今参上』の動員数に関するデータはないので表には反映していない。

[11]同論文においては「初期映画」とした。

[12]歌唱時間Aとは、美空ひばりが画面上に確認でき、かつ彼女の歌が聞こえてくる時間をさす。なお、歌唱時間には前奏や他者による掛け声などの時間も含んでいる。また、鼻歌や寝言での歌、さらには踊りのみの場合も「歌」としてみなしている。歌唱時間Bは、歌唱時間Aに美空の歌が彼女の映像を伴なわずに聞こえてきた時間を加えたものであるが、クレジット・タイトルの背景音楽として美空の歌が流れている場合もこれに含んでいる。割合はすべて小数点以下第二位を四捨五入したもの。なお、DVD／VHSビデオにおける時間を計測しているため、作品の一部がカットされてDVD／VHSビデオ化されている場

㉕大当り三色娘	93'40"	37'18"	12'34"	15'41"	39.8%	13.4%	16.7%	33.7%
㉖青い海原	86'45"	42'00"	9'29"	13'48"	48.4%	10.9%	15.9%	22.6%
㉗ふり袖太鼓	82'18"	34'10"	3'12"	5'29"	41.5%	3.9%	6.7%	9.4%
㉘ひばりの三役競艶雪之丞変化前篇	90'15"	48'53"	2'03"	4'14"	54.2%	2.3%	4.7%	4.2%
㉙ひばりの三役競艶雪之丞変化後篇	88'15"	42'50"	4'34"	7'23"	48.5%	5.2%	8.4%	10.7%
㉚娘十八御意見無用	74'16"	42'35"	4'49"	7'38"	57.3%	6.5%	10.3%	11.3%
㉛おしどり駕籠	85'55"	37'21"	6'31"	8'38"	43.5%	7.6%	10.0%	17.4%
㉜大当り狸御殿	97'45"	20'39"	8'12"	12'05"	21.1%	8.4%	12.4%	39.7%
㉝丹下左膳	99'20"	14'21"	2'18"	5'11"	14.4%	2.3%	5.2%	16.0%
㉞かんざし小判	85'00"	42'33"	5'51"	10'58"	50.1%	6.9%	12.9%	13.7%
㉟恋愛自由型	71'01"	35'24"	5'09"	7'48"	49.8%	7.3%	11.0%	14.5%
㊱花笠若衆	87'58"	38'49"	6'19"	10'22"	44.1%	7.2%	11.8%	16.3%
㊲女ざむらい只今参上	92'49"	42'48"	8'56"	11'12"	46.1%	9.6%	12.1%	20.9%
平均	86'48"	32'37"	5'09"	7'37"	37.6%	5.9%	8.8%	15.8%
松竹優勢時代前期平均	82'50"	26'54"	5'41"	7'48"	32.5%	6.9%	9.4%	21.1%
松竹優勢時代後期平均[13]	84'45"	34'34"	7'41"	11'02"	40.8%	9.1%	13.0%	22.3%

映画における役柄や演技はさらに、美空ひばりを論じるうえで重要な要素とみなされるようにもなった。『キネマ旬報』の1958年４月下旬号における「美空ひばり・その魅力を分析する」と題する特集である。

5.「美空ひばり・その魅力を分析する」

同誌の63～69ページにわたって掲載された特集は、法政大学教授で心理学が専門の乾孝、社会心理研究所[14]所員の柳真沙子、そしてキネマ旬報編集部が執筆を担当し、順に「美空ひばりを支えるもの」「ひばりの十年とその役割」「ひばりに対する各界の意見」を著わしている。

このなかで具体的に映画作品の分析をおこなっているのは柳である。柳は1949年から58年までを「彼女が生れ、彗星の如く売り出した前半期五年と、少女から大人への危険な転換期を切り抜け、今日に至る後半期の五年の二つの時期に分けて」、分析をおこなっている[15]。

> ひばりは、なぐさめから、さらに進んで楽しみを大衆に与えるようになった。前半期の旅のハナたれ小僧のような近親感はうすれ、“可愛いい、愛らしい”という言葉から、“すばらしい、上手だ”という言葉に変わってきた。
>
> ひばりは大衆の中で生れ育ち、そして完全に、大衆の上に立ってしまった。もうひばりは、同情されたり、涙を出させたりはしない。ひばりは、大衆に楽しみを与える希望であり、夢、あこがれと変って来た（66-67）。

そして、異性役を含む三役を演じた『競艶雪之丞変化』を引き合いに出したうえで、後期の

合には、カット分はデータに反映されていない。

[13]後期には美空が出演した映画の歌唱場面だけを編集して繋ぎ合わせた作品（『ひばりの歌う玉手箱』『美空ひばりの春は唄から』）が含まれており、これらを除くと、出演率は40.0%、歌唱率aは7.7%、歌唱率bは11.5%、歌唱率cは19.2%となり、演技重視の傾向はさらに鮮明になる。

[14]当時、一橋大学教授であった南博によって設立。

[15]柳は歌の歌詞も分析しているが、本稿では取り上げない。

美空を次のように述べている。

> ひばりのように映画畑で、このように男役に人気のある者は少い。また、普通の女優のように、美しい娘役も自然に出来る。(中略)子供から抜け出したひばりは、性を超越した“ひばり”という概念が象徴する魅力を持つようなって来た（68)。

そして、「日本調からジャズ調まで、子供から大人まで、女から男までと、歌に映画に舞台に、ひばりのその多角さはおどろくもので、役柄も、時代劇では、お姫さま、下町娘、若衆、役者、現代劇ではサラリーガール、大学生、バスガール、お嬢さまなど、なんでもこなしている」と指摘し、「役柄やすべての点に、超人的なイメージを作り上げることに成功しあわれみや共感から抜け出し、大衆の中から、プリンセスとして生れて、大衆に夢と、楽しみを与える偉大な人と生長したのである」と結んでいる。

時代区分とその理由づけの曖昧さや、主観的な印象に依拠した分析や、根拠が脆弱な結論など、いくつかの問題を孕んでいるものの、この「ひばり論」が『キネマ旬報』という老舗の映画専門誌に掲載されたことは、美空ひばりの映画が歌本位として軽んじられていたことを振り返ると、非常に意義深いと言うことができよう。

それでは東映優勢時代において、美空はどのような役柄を演じ、どのように受容されたのであろうか。本稿に続く「美空映画（1955.7-1958.6）の特徴」で見てみたい。

参考文献

上前淳一郎　1985　『イカロスの翼――美空ひばりと日本人の40年』東京：文藝春秋（文藝文庫）。

大下英治　1992　『美空ひばり――時代を歌う』東京：新潮社（新潮文庫）。

嘉山登一郎　1990　『お嬢…ゴメン。――誰も知らない美空ひばり』東京：近代映画社。

キネマ旬報編集部編　1994　『美空ひばり映画コレクション』東京：キネマ旬報社。

斎藤完　2010a　「美空ひばりの普及と初期映画の関係」『山口大学教育学部　研究論叢　芸術・体育・教育・心理』第60号：115-126。

斎藤完　2010b　「初期美空映画の特徴について：役柄とパターンに関する一考察」『山口大学教育学部　研究論叢　芸術・体育・教育・心理』第60号：127-139。

斎藤完　2011　「美空ひばりの普及と映画の関係（1952. 7 – 1955. 6）――「松竹優勢時代後期」――」『山口大学教育学部　研究論叢　芸術・体育・教育・心理』第61号：137-145。

時事通信社　1957　『映画年鑑　1957』東京：時事通信。

時事通信社　1958　『映画年鑑　1958』東京：時事通信。

時事通信社　1959　『映画年鑑　1959』東京：時事通信。

竹中労　2005　『完本　美空ひばり』東京：筑摩書房（ちくま文庫）。

美空ひばり　1989　『ひばり自伝』東京：草思社（新装版）

柳真沙子　1958　「ひばりの十年とその役割」『キネマ旬報』1017号（通巻）：64-68。

吉田司　2003　『ひばり裕次郎　昭和の謎』東京：講談社（講談社＋α文庫）。

著者不詳　1958　「美空ひばり母娘」『週刊読売』４月27日号：56-60。

著者不詳　1955　「1955年の花形歌手　ベストテン決定！」『平凡』昭和30年３月号：38。

著者不詳　1956　「皆さまがえらんだ1956年度の第８回男女歌手ベスト・テン発表」『平凡』

昭和31年３月号：146-147。
著者不詳　1958　「1958年　栄冠ここに輝く　第10回花形男女歌手ベストテン決定！」『平凡』昭和33年３月号：174。
著者不詳　1958　「いずみ」『読売新聞朝刊』３月27日。
著者不詳　1955　「邦画界はひばりブーム」『東タイ』11月７日。